

留学生の目を通して見るこども食堂

ーサービス・ラーニングによる気づきと学びー

菅川裕希

Children's Cafeterias Through the Eyes of International Students : Learning and Awareness Through Service Learning

Yuki SUGEKAWA

キーワード：サービス・ラーニング こども食堂 人とのつながり 居場所 社会参加

1. はじめに

近年日本社会において多様な言語的・文化的背景を持つ人々が急増し、多文化共生の必要性が一層高まっている。そのため、異なる価値観や文化を理解・受容し、他者と協働する力を身につけることが求められている。大学の日本語教育も、従来の個人の言語能力向上に留まらず、日本語による対話や地域活動への参加を通じて、留学生が社会とのつながりを深め、市民の一員として相互理解や協働の力を育む支援が期待されている。

本実践は、留学生が地域や人々とつながって日本社会について学ぶ実践の1つである。本稿は、2022年度の実践を踏まえ、2023年度の日本事情科目におけるこども食堂でのサービス・ラーニングの実践について報告する。

2. サービス・ラーニングとは

近年、大学ではアクティブ・ラーニングの推進や大学の地（知）の拠点化の流れを受け、サービス・ラーニング（以下、SL）が注目を集めている。SLとは「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」（文部科学省 2013）である。

SLは体験学習の一手法であるが、Furco（1996）は他の体験学習との違いを、サービス活動と学びのどちらに焦点があるか、サービス活動の利益が与え手と受け手のどちらにあるか、という観点を以てSLの特徴を説明している（図1）。

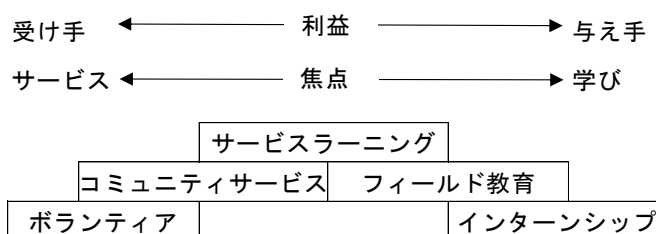


図1. それぞれのサービスプログラムの特徴（Furco 1996）

サービスすることに重点が置かれ、サービスの受け手が利益を得るボランティア活動や、学生の学びを重視し、学生が利益を得るインターンシップに対して、SLは、サービス活動の利益が与え手と受け手双方にあり、サービス活動と学びのバランスが取れている。そのため、教育の一環として行われ、学生がより深い学びを得るために、何を学んだか、などの振り返りの機会を重視していることが特徴である。

日本語教育におけるSLの実践は少しずつ行われるようになってきた（井上 2016；井手・土居 2016；黒川 2009；黒川 2012；菅川 2023；土居・井手 2015；土居・井手 2017）。これらの実践では、言語知識的側面のみならず、社会文化的側面や責任感、進路選択、「共生」に対する意識の深化などの学習効果が報告されている。

しかしながら、学生自身が客観的に振り返る難しさや、学びや気づきを深めるための工夫が必要であること（土居・井手 2015）が指摘され、学習者による具体的な目標や課題の設定（井手・土居 2016）や、「何を学ぶか」という問題意識の醸造（土居・井手 2017）が重要であることが提言されている。

振り返りの方法として、島崎（2018）は地域の祭

りで留学生が踊る実践を通じて、文化概念についてディスカッションを行い、観察する際の焦点やものを見る視点を示した結果、内省の質が変わり、深い気づきや学びが起こったと報告している。

大学における留学生教育に関する実践はまだ事例が限られており、留学生を対象とした SL の可能性については、さらなる実践報告が求められている。

特に、留学生の日本語教育に携わる教員や支援者にとっては、学生がどのような気づきを得るのか、また、学びを深めるための支援のあり方についての報告は貴重な資料となるだろう。

本稿では、2023 年度の実践における活動報告書、最終課題、インタビューデータを分析し、留学生が活動を通じて得た学びや気づきについて報告する。

3. なぜこども食堂での実践なのか

3.1. こども食堂とは

こども食堂は、子どもが一人でも訪れることができる無料、または低額の食堂（湯浅 2017）であり、地域の子どもの多世代の住民が「食」を通じて交流できる「居場所」として機能している。特に、経済的困難を抱える人々や、他者とのつながりを求める人々にとって、重要な支援の場である。その発端は、近藤博子氏が、ひとり親家庭で精神的な問題を抱えた母親が食事を提供できず、学校給食に頼る子どもの状況を知ったことにある。現在では、食事提供に加え、学習支援などさまざまな活動が展開され、全国に広がっている。

「居場所」とは、全国こども食堂支援センター「むすびえ」によると、「自分らしくいられる場所」で、子どもやその親、そして地域の高齢者などが周囲を気にせず、ありのままの自分を出せる場所、ありのままの自分を受け入れてもらえる場所」と定義される。こども食堂という名称を持ちながら、「どなたでもどうぞ」と幅広い世代に門戸を開き、多様な交流を可能にする地域コミュニティの拠点となっている。

3.2. こども食堂を取り巻く課題

こども食堂の設立背景には、経済状況や雇用環境の悪化、非正規雇用やひとり親家庭の増加による貧困層の増大、地域コミュニティや人間関係の希薄化といった社会的課題がある。多くのこども食堂は、貧困対策を前面に出さず、地域住民同士の交流促進や子どもの「居場所づくり」を目的として運営されている（農林水産省 2017）。しかし、マスメディア

において「こども食堂＝貧困対策」として報道されたことにより、「こども食堂は貧困家庭の子どもを集める場」というイメージが定着し、結果として支援を必要とする子どもたちを遠ざける要因になっているとの指摘もある。

こども食堂が内包する貧困問題を理解するには、「絶対的貧困」と「相対的貧困」という概念が重要である。経済協力開発機構（OECD）などの国際機関は、「絶対的貧困」は、生きる上での最低限の生活水準が満たされていない状態を指し、「相対的貧困」はその国の中で大多数と比較して貧しい状態としている。日本の相対的貧困率は 16% に上り、「6 人に 1 人」が相対的貧困に直面している。しかし、日本社会では「日本には貧困の子どもなどいない」という認識が根付く、実態との乖離が生じている。相対的貧困にある子どもたちは外見で判断しづらいため、教室で資料を読むだけでは理解が浅く、「こども食堂＝貧困対策」というイメージを強化するリスクがある。また、この課題を自分ごととして捉えることが難しい点も課題である。

筆者は、書籍などから得た情報を通じてこども食堂について概念的な理解は得たものの、実際にどのような人が訪れ、どのような雰囲気のところなのかといった具体的なイメージを持つことはできなかった。しかし、何度も足を運ぶうちにこれらの疑問に対する理解が深まっていった。この経験から、日本社会についての学びと「こども食堂」での体験学習を組み合わせる SL のアプローチが有効であると考えた。また、サービス活動を通じて、社会的課題への理解を深めるとともに、異なる価値観や背景を持つ人々と共感し、受け入れ、協働する姿勢を育むことができると考えた。

4. 本取り組みの概要

4.1. サービス活動の受け入れ先

筆者は、2022 年度よりこども食堂 X での SL の取り組みを実践している。こども食堂 X は小学校前の公園内の集会所で、毎週金曜日の 16 時～19 時まで開かれ、高校生までは無料、大人は 300 円、お年寄りや 200 円と安価で食事を提供している。「よく来たね」「おかえり」と出迎えられる雰囲気の中、小学生から年配のボランティアが中心となり、農家や企業、フードバンクからの寄付により運営されている。子どもや親子など様々な人が訪れ、おしゃべりを楽しむ地域交流の場となっている。

4.2. 2022 年の実践と課題

2022 年度の SL 実践（菅川 2023）では、交換留学生と学部留学生を対象に開講される「日本事情」科目において、こども食堂でのサービス活動を取り入れた。実践の目的は、授業でこども食堂を取り巻く課題について学び、サービス活動に従事することで日本社会や文化への見識を広めることであった。授業は週 1 回（各 90 分）の全 15 回で、第 5 回から第 11 回までを大学での学びとサービス活動に充てた（図 2）。

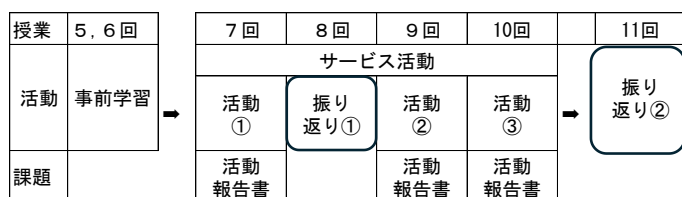


図2. 授業の流れ（2022年度）

事前学習では、こども食堂の設立経緯や、居場所の必要性、人とのつながりといった現代社会の課題を取り上げ、話し合いを通して理解を深めた。その後、3 回のサービス活動では、食事配膳のサポートや子どもとの交流に取り組んだ。各活動後には、こども食堂の様子や学生が考えたことを活動報告書に記述させた。その後、振り返りシートを用いて活動を振り返らせた。振り返りシートは、こども食堂に関わる人々やそこで見聞きしたこと、活動を通じた意識や考えの変化を記入するものであり、それを基に、話し合いを行わせた。

その結果、学生は当初「貧困」や「恵まれない人が集まる場所」と捉えていたこども食堂について、食事提供だけではなく、地域住民にとっての居場所や交流の場としての重要性を認識するに至った。また、一部の学生は「地域社会とのつながり」の大切さや、他者のために役に立つことへの喜びを実感した。しかし、振り返りにおいて行動記録や感想に留まる学生もあり、学生間で振り返りの質に差が見られた。振り返りの差が生じた要因として、以下の 2 点が考えられる。

（1）分析観点の欠如

事前学習では、こども食堂の背景や意義について資料を読み、話し合いを通じて背景知識の理解を深めた。しかし、振り返りの際に、事前学習で学んだ「こども食堂の目的や役割」、「居場所」、「人とのつながり」という観点が活用されず、振り返りの焦点が明確でなかったと考えられる。

また、活動報告書および振り返りシートは、こども食堂の様子やサービス活動を通じて得られた学びや気づき、意識の変化を記述し、分析や考察をするものではなかった。

（2）振り返りの方法

学生は、各活動後に活動報告書を記述し、主に個人で振り返りを行った。そのため、自分自身の経験や学びを振り返る機会は得られたものの、他者の視点を取り入れる機会は限定的であった。また、実践者からのフィードバックや問いかけが十分に活用されていなかった。

これらの課題を踏まえ、2023 年度は、事前学習でこども食堂とその背景にある「貧困」や「人とのつながり」などの課題がどのように関連しているのかを可視化するタスクを取り入れ、分析の観点を明確に示した。活動報告書や振り返りシートでも、事前学習で示した観点を活用し、振り返りを行わせた。

振り返りの方法として、グループや全体での振り返りを実施することで、他者の視点を共有し、自身の学びを相対化する機会を増やした。さらに、実践者からの具体的な問いを投げかけることで、考察を深めることを意図した。このような振り返りの強化を通じて、サービス活動の意義を再確認し、学びの質を向上させることを目指した。

4.3. 本実践の概要

4.3.1. 受講者

受講者は、韓国人交換留学生 3 名（男性 1 名、女性 2 名）、ベトナム人学部留学生 2 名（女性）、中国人学部留学生 1 名（女性）の 6 名である。そのうち全てのサービス活動に参加し、ほぼ欠席がなかった 2 名（K、C）を分析対象とした。K は来日したばかりの韓国人交換留学生で、日本語を専攻している。C は日本語学校で 2 年間日本語を学び、現在は大学 1 年生で国際コミュニケーションを専攻する中国人留学生である。両者とも日本語能力試験 N2 を取得している。

初回授業では、ボランティア経験の有無や、地域住民との交流意欲、子どもとの交流について、4 段階評価でアンケート調査を行った。ボランティア経験があったのは C のみであった。地域住民との交流意欲については、C、K ともに「3」と回答しており、いずれも意欲的であった。また、子どもとの交流に関して、C は「3」と回答し得意と感じていたのに対して、K は「2」と回答し、やや苦手意識が見られた。

4.3.2. 授業の内容

本実践は 2023 年前期の日本事情科目において、週 1 回 (90 分) 全 15 回実施された。2022 年度の実践からの課題を踏まえ、振り返りの質を向上させるために、以下の点に工夫を行った。①分析観点を明確にすることで、考察の焦点を定めやすくし、②グループおよびクラス全体での振り返りを通じて、多様な視点や意見を共有し、理解を深めることを目指した。授業の内容とスケジュールを表 1 に示す。

表 1. 授業の流れとスケジュール (2023年度)

	授業	授業内容	課題
	1	オリエンテーション	
事前学習	2~5	・世界・日本の貧困問題 ・人間関係の希薄化 ・人とのつながりと居場所 ・こども食堂の始まりや運営 ・食品ロス	
	6	サービス活動の準備	
サービス活動	7	サービス活動①	活動報告書
	8	振り返り<全体>	
	9	サービス活動②	活動報告書
	10	サービス活動③	活動報告書
振り返りグループ全体	11	振り返り① —サービス活動について—	
	12	振り返り② —こども食堂の運営と支援の在り方—	
事後学習	13~15	・他のこども食堂の活動 ・貧困の連鎖 ・学歴による収入格差	

事前学習では、こども食堂の設立経緯や、地域交流や居場所としての役割があることを学び、貧困問題への理解を深めるために、新たに「絶対的貧困」と「相対的貧困」の概念も取り上げた。

また、筆者が作成した「留学生にとってアルバイト先が居場所になっていく」事例を基に、学生自身が「居場所」と感じる場所と理由、また居場所づくりに必要な要素について話し合った。

さらに、人間関係の希薄さにも触れ、学生自身の生活環境を振り返り、人とのつながりの状況や、深さ、つながりの築き方についても話し合わせた。

サービス活動の準備では、「留学生としてこども食堂でできること」についてグループで話し合わせた。母語での鳴き声を使った動物当てクイズや、ギターの演奏、中国語の漢字から意味を推測するクイズな

ど、文化や言語を活かしたアクティビティをすることとした。これは、食堂を訪れる人々に有意義な体験を提供し、交流を深めることが目的であった。

各活動後には、以下の内容を含む活動報告書を記述させた。まず、「こども食堂の様子」を記録させ、現場の実態を把握するとともに、授業で学んだ「貧困」、「居場所」、「人とのつながり」について振り返らせることで、学びを深めることを目的とした。また、「こども食堂はどのような場所か」という問いを通じて、こども食堂の役割や意義、課題を考察させた。さらに、「留学生の企画の成果と感想」や「困ったことや疑問」を記述させ、学生自身の成長を実感し、次回以降の活動に活かす機会とした。3 回目の活動後には、活動報告のまとめとして、「ボランティア活動で学んだこと」、「こども食堂はどのような場所か」「サービス活動の意義」について記述させた。

活動後の振り返りは①と②の 2 回で行った。まず、個人で振り返りシートを記入させ、グループまたは全体で話し合わせた。振り返り①では、事前学習と活動後の振り返りを中心に行い、事前学習で学んだ「世界・日本の貧困」「居場所作り」「人とのつながり」「食品ロス」の観点から、活動を通してどのように実感し、深めることができたかを振り返らせた。また、ボランティア活動やこども食堂の意義についても考察させた。

振り返り②では、こども食堂の運営や支援の在り方について考察させた。

<振り返り①の問い>

- ・「世界・日本の貧困」、「居場所作り」、「人とのつながり」、「食品ロス」について理解が深まった点
- ・サービス活動に参加する意義
- ・こども食堂は誰のためにあるのか

<振り返り②の問い>

- ・「誰でも食事に来てもいい」こども食堂は、本当に困っている人の支援になっているのか
- ・学生が企画した活動の感想と工夫した点
- ・子どもとのコミュニケーションで工夫した点

また、最終課題は「ボランティア活動を通して学んだことと授業前に書いた「貧困とは」を見て、授業後に考えが変わったこと」の 2 点について、レポートを書かせた。

5. 留学生の学びと気づき

本章では、主に最終課題とインタビューデータを基に、留学生 K と C の学びや気づきについて報告し、考察を加える。なお、留学生の記述における「ボランティア活動」は「サービス活動」と同義である。

5.1.Kの学びと気づき

5.1.1. こども食堂に対する捉え方の変容

Kは、事前学習を通して3つの問いを持っていた。

問い①：なぜ子どもに食事を提供するのか

問い②：なぜこども食堂は誰でも利用できるのか

問い③：こども食堂の運営者とその目的

Kの母国では、経済的に困窮する大人対象の無料食事提供はあるが、子どもに対する支援は一般的でなく、見た目で困窮していない人が支援を受けることに対して、周りから不自然に思われることがあると述べている。そのため、こども食堂が食の支援だけでなく、居場所を提供し、地域コミュニティのつながりを促進する場である点は、Kにとって理解が難しかったと考えられる。

しかし、Kは、サービス活動を通じて、これらの問いの答えを見つけ、自身の「こども食堂」への捉え方を見直し、変容させていった。

事前学習で理解した日本の貧困に関して、当初その実態は「目に見えるもの」として捉え、こども食堂の子どもたちをその観点から捉えようとしていた。

「日本の子どもの貧困は見た目が他の子どもと変わらないため、貧困の実態や状況が外からではわかりにくいと言われている。(中略) 授業で学んだ通りに貧困に対して見ようとしたが貧しそうな子どもは全然いなかった」(以下、下線は筆者による、原文ママ)

「子供食堂に行く前には、授業で 子供の貧困に対して学んだけど、それは私は目で見えることだと思いました。その考えを持ってボランティアに行った時には、目で区分されないで、貧困の子供たちと貧困ではない子供たちが分かれてなかったです。それで、ボランティアをしなかったら、こんなのを分らなかったと思って」

Kは「貧困」を経済的困窮のイメージに基づく「目に見えるもの」と捉えていたが、サービス活動を通じて、「貧困」は必ずしも「目に見えるもの」ではなく、「見えにくいもの」または「見えないもの」であると再認識している。Kは「見えないだけで、実際

は貧困の子どもたちが来ると思います」と述べ、日本における「貧困」は外見から判断できない問題であると理解した。

また、子どもたちの様子を次のように述べている。

「みんな、子供たちの中でも、あの人は貧困だって言いながらも、いじめをするとかの行動も全然なかったと思って、みんな一緒にそれを関係なく一緒に遊んでることが、その気にしないことが、私には、みんな貧困を考えなくて、一緒にすむ(過ごす)と思いました。」

Kは子どもたちが分け隔てなく一緒に遊ぶ様子を見て、こども食堂を「みんなが貧困を意識せず過ごせる場所」として、誰にとっても「居場所」となり得る場所として感じるようになった。

5.1.2. 「居場所」の概念理解

Kは、母語にない「居場所」という言葉の意味や概念について、サービス活動前は理解が難しかったが、こども食堂で子どもたちが幸せな顔をしているのを目にし、「おいしいごはんを待っているし、ボランティアと楽しく話したりするのが子どもの楽しみだ」と感じたことで、「居場所」の意味を実感した。活動を通して、Kはこども食堂を「心が安定する」「みんな楽しく話したり、ご飯を食べたりする」場所であると捉えるようになった。

このように、「居場所」という観点を意識したことで、Kはその言葉が単に物理的な空間を指すのではなく、人々が心地よく、安心して過ごせる環境を意味することを理解するようになった。実際にK自身も子どもたちと遊び、ご飯を食べる中で、「心が温かくなる」という経験をし、それを「幸せ」と表現している。

また、Kはこども食堂について「運営するのは簡単ではない」と感じ、問い③「こども食堂の運営者とその目的」に関心を寄せていた。活動を通じて、子どもたちや地域の人々と交流することで「私も手伝って、その瞬間に心が温かくなりました」と述べ、こども食堂がボランティアにとっても「居場所」になっているのではないかと考えるようになった。

5.1.3. 人とのつながりの大切さ

Kは、「人とのつながり」という観点から、サービス活動を振り返り、コミュニケーションを通じて共

感や相互理解が深まる中で、その大切さを実感した。

事前学習で人とのつながりの大切さを言及していた K は、最終課題で以下のように記述している。

「人とのつながりの大切さはこども食堂に行く度にどんどん感じる。国が違っても人とのつながり(ができるの)はすごいと思う。話をすることだけでみんな幸せになるのが不思議だった。」

活動報告書には「子どもたちが私を待っていたことを知って喜びました」「外国人だからといって遠ざけないで近づいてくれた」と記述しており、この経験から K は周囲から受け入れられていると感じ、つながりの実感を深めるきっかけとなったと考えられる。

また、K は食事に來た母親から流行している食べ物を教わり、子どもからある漢字に別の意味があることを学んだ。このような何気ない会話の中で得られる情報や経験が、K にとって「想像以上に」多くの学びや幸福感を得たと感じさせ、コミュニケーションの価値をさらに強く実感させたと考えられる。

一方で、K は現在の大学生活において、日本人学生とのつながりをあまり実感できていないと述べている。交流意欲はあるものの、実際には日本事情科目にボランティアとして参加している日本人学生 1 名以外に交友関係がない状況である。K は日本人学生との年齢差から距離を感じ、相手から怖がられていると感じる場面もあるという。そのため、大学生活におけるつながりの欠如が、こども食堂での交流を通じて得た「人とのつながり」の大切さを一層印象づけたと考えられる。

このように、こども食堂での経験は単なる日本社会とのつながりだけでなく、異なる国籍の人々との交流も K にとって大きな学びの一つであった。特に、K は、こども食堂で日本語を使ってさまざまな国籍の人々が交流し、意思疎通ができる状況に深く感銘を受けている。「国が違っても人とのつながり(ができるの)はすごいと思う」という記述や、インタビューでの「一緒にボランティアした中国人とベトナム人も日本人の子たちもみんな、みんな日本語で話して意味が通じることが不思議だったんです」という発言からは、国境を越えた人とのつながりを実感する貴重な体験となっている。

5.1.4. サービス活動の意義

K は、サービス活動の意義について、以下のように述べている。

「この授業でボランティア活動を初めてしましたが、考えたより大変ではありませんでした。むしろ楽しく食堂の仕事を手伝いました。子どもが私に関心を持って話しかけてくれるのが嬉しかったです。そしてボランティアをして子どもたちが幸せになる様子を見て私も胸がいっぱいでした。そのように私によってこのボランティアは大変ではなく楽しいことだと考えを変わるきっかけになりました。」

K は、ボランティア活動は大変だという先入観を持っていたが、こども食堂での活動を「楽しいもの」とであると認識を改めている。また、子どもたちとの交流が喜びや充実感をもたらし、自らの関わりが他者に良い影響を与えることに喜びを見出している。

一方で、K は活動前に「子どもとどのように接すればよいか心配していた」と述べていたが、他のボランティアが子どもたちの目線に合わせ、やさしく話しかける様子を観察し、2 回目以降は話し方や内容を工夫し、子どもとの距離を縮めようとした。その結果、やさしい話し方を身につけることができた実感すると共に、子どもたちからも積極的に話しかけられるようになり、K が来ることを楽しみにする子どもも現れた。

このように、K はこども食堂での活動を通じて、他者と積極的に関わることの意義を理解した。そして「ボランティアは大変なもの」という先入観が「楽しく意義のあるもの」へと変化し、主体的な関わりや他者貢献の意識が向上したと言える。

5.2.C の学びと気づき

5.2.1. こども食堂に対する捉え方

C は、こども食堂では、「居場所」、「人とのつながり」、「食品ロス」の観点から活動を捉え、子どもたちや地域の人々と関わる中で、様々な気づきを得た。

まず、C はこども食堂の様子について「子どもたちは楽しく過ごしています」「ご飯を食べないで、ずっと食堂で友達を待っている人もいます」と述べている。C は、子どもたちとボランティアのやり取りや、友達を待つ子どもたちを見守る姿に注目し、こども食堂が単なる食事提供の場ではなく、子どもたちにとって「安心を感じられる場所」であり、「居場所」として機能していることに気づいた。C は、「居場所」において、人とのつながりや安心感が重

要な要素であると実感した。

また、活動報告書で C は、年配の女性 3 人から「毎週 3 人で一緒に来る」と聞き、「3 人は仕事があって、忙しいけど、毎週こども食堂で集まります。こども食堂はこのような場所としてもできます。」と驚きを示している。これにより、地域の人々にとっても「人とのつながり」を育む場であることを理解している。

さらに、C は「最近の人たちは繋がりがあまりよくない」「これは問題だと思います」と、現代社会における人とのつながりの希薄さを指摘し、母国では家族での食事中に若者がスマホを使い、親子間の会話が減る問題を挙げた。しかし、こども食堂では携帯を使わず、楽しそうに会話する姿を見て、コミュニケーションの大切さを再認識したと語っている。

また、食品ロスについても言及している。C は食事準備を手伝う中で、近所のパン屋からパンが提供されたことを知り、「日本のこども食堂は子どもの貧困だけではなくて、食品ロスを改善できる」と考えるようになった。

このように、居場所としての機能や人とのつながりの重要性を理解し、さらに社会課題である食品ロスの改善に向けた可能性についての認識も深まった。これらの経験から、こども食堂がもつ多面的な役割とその意義を深く理解することができた。

さらに、C は、母国での経済的困窮者への支援と日本のこども食堂の違いに注目している。C は「中国の食堂のような活動は、ご飯を食べられない人たちにだけ。誰かご飯を食べられない人たちが来て、ご飯を出します。(食事が) 終わったら、何も解決できない」と述べ、こども食堂が食事提供だけでなく、交流や居場所としての役割を持つ点を再評価している。そして、「中国にこのような場所がもっと多くなるといい」「こども食堂を中国で作りたい」と語り、日本のこども食堂のモデルを母国にも広めたいという意欲を示すようになった。

5.2.2. 他者への配慮に関する学び

C はこども食堂での活動を通じて、食事提供における「他者への配慮」や「公平性を重視した準備」の重要性を学んだ。特に、全員が平等に食事を楽しめるよう事前に準備をすることの大切さを理解し、自己の価値観との違いに気づいた。C は日本社会の一側面について、次のように述べている。

「準備の時は、私ならば、人数などはあまり考えま

せん。例えば、今日はバナナを食べます。でも、バナナは足りない人は食べない。(私はそれで) いいと思います。でも、こども食堂では(中略)今日は 60 人ぐらいなので、60 本バナナを準備します。みんなが食べられるように準備します。普通のお料理は、別でみんな食べる方がいい。でも、小さいもの、例えばバナナなどは、食べなくてもいいと思いました。」

この発言は、食事が不足した場合は食べられない人が出るのもやむを得ないとする価値観が示されている。しかし、こども食堂 X では、事前に人数を予測し、全員が平等に食事できるよう細やかな配慮がされている。こども食堂での配慮の在り方は、単に食事を提供する側の視点にとどまらず、提供される側が平等に楽しめるように考慮されている。この点は、C にとって新たな価値観に触れるきっかけであり、自身の考え方とは異なる「他者への配慮」や「公平性を重視した準備」の重要性を学ぶ機会となった。

5.2.3. サービス活動の意義

C は、当初サービス活動を単なる授業の課題と捉えていたが、初回の活動を通じてこども食堂に興味を持ち、日本社会を理解する貴重な経験と考えるようになった。サービス活動の意義を、以下のように述べている。

「もう今、(私は) 子供たちと話すことがあるので、もし、なんか子どもたちと会ったら子どもたちも嬉しかったです。もし、友達になったら、子供たちの悩んでいることも聞こえる、解決できる。手伝ってあげると思います。だから、意味があると思います。」

この発言から、C は、自分の学びを超えて、他者との関係を大切に、「子どもたちのため」にも役立つと考えるようになった。この変化は、C がサービス活動を通じて社会的問題への認識を深め、自己の社会的役割を意識するようになったことを示している。課題として始めた活動が、他者とのつながりや社会への貢献へと意識が広がった例である。

6. まとめと今後の課題

本実践では、2022 年度の日本事情科目におけるこども食堂での SL 実践の課題を踏まえ、2023 年度では、事前学習で「貧困」「居場所作り」「人とのつながり」「食品ロス」を取り上げ、振り返りでこれらの

観点を活用させた。また、個人だけでなく、グループやクラス全体での振り返りを実施した。これらの観点を軸に振り返ることで、留学生 K と C は以下の3点において、より深い学びや気づきが得られた。

(1) こども食堂に対する捉え方の変容

こども食堂を単なる食事提供の場ではなく、交流を通じて居場所や人とのつながりを生み出す重要な場として捉えるようになった。また、貧困は「目に見えるもの」だけでなく、「目に見えない」形でも存在することを学び、こども食堂がそうした見えにくい貧困の対応に寄与していることに気づいた。

(2) 人とのつながりの大切さ

こども食堂での交流を通じて、共感や相互理解が深まる経験を重ね、人とのつながりを築く上でコミュニケーションの重要性を強く実感した。また、自国での人間関係の希薄さを振り返り、コミュニケーションがいかに人々の絆を深め、学びを広げるものかを改めて認識した。

(3) サービス活動の意義

K は子どもとのコミュニケーションを工夫する中で、喜びや充実感を感じるようになった。当初はボランティアに対して「大変だ」という先入観を持っていたが、活動を通じて「楽しく意義深いもの」へと認識が変化した。また、C は、活動を通じて自己の社会的役割を意識するようになり、今後の社会参加への意欲を高めるとともに、他者とのつながりを大切にする姿勢を育むきっかけとなった。

これらの学びは、日本語によるコミュニケーションを通じて、他者と協働し、つながりを築く中で意識変容や自己成長であり、多文化化する日本社会における相互理解の基盤、ひいては「ともに生きていく」ための重要な力となると考えられる。

また、「貧困」のイメージが「こども食堂」の多面的な役割への理解を妨げる可能性も明らかになった。こども食堂の多面的な役割は、教科書や資料だけでは捉えにくいものであり、現場での体験を通じた学びには大きな意義がある。

しかし、振り返りシートを用いた教師からの問いやクラスメイトの視点が、振り返りや学びを深めたのかは明確ではない。今後は、振り返りの場で、学生の気づきや学びをいかに深めるか、具体的な方法や教師の問いの在り方を検討する必要がある。

参考文献

井上里鶴 (2016)「日本語学校と地域社会をつなぐサ

ービス・ラーニングプロジェクトに参加した外国人留学生の学び―」『筑波大学地域研究』Vol.37, pp131-150

井手友里子・土居美有紀 (2016)「サービ斯拉ーニングで学ぶ日本語コースボランティア活動の振り返りを深めるために―」『南山大学国際教育センター紀要』16, 21-29.

黒川美紀子 (2009)「サービス・ラーニングが開く日本語教育の可能性―ボランティア活動をした二人の学生のケース・スタディから―」『ICU 日本語教育研究』5, 3-18.

—— (2012)「サービス・ラーニングの要素を取り入れた上級日本語教育の試み」『日本語教育』153, 96-110

島崎薫 (2018)「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか―仙台すずめ踊りの実践を通して―」『東北大学高度教養教育学生支援機構紀要』4, 396-406.

菅川裕希 (2023)「サービス・ラーニングにおける留学生の学びと変化：地域のこども食堂でのサービス活動を通して」『広島大学日本語教育研究』33, 24-31.

土居美有紀・井手友里子 (2015)「日本語セミナークラス Japanese in Volunteering の実践―振り返りと気づきに焦点を当てて―」『南山大学国際教育センター紀要』15, 71-83.

——・—— (2017)「サービ斯拉ーニングを通して日本社会・文化を学ぶ―日本語セミナーコース Japanese in volunteering の実践報告」『国際教育センター紀要』第17号, 39-45.

農林水産省 (2017)「子供食堂向けアンケート調査集計結果一覧」

<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-40.pdf> (参照日 2024.01.28)

文部科学省 (2013)「地(知)の拠点整備事業(COC)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1346066.htm (参照 2024.01.28)

湯浅誠 (2017)『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書.

NPO 法人全国こども食堂支援センターむすびえ
<https://musubie.org/faq/> (参照 2024.01.28)

Furco, Andrew. (1996)"Service-Learning: A Balanced Approach to Experiential Education", Service Learning, General. 128.